

アスレティックトレーナーを目指す学生の
スポーツ動作観察時の目のつけどころに関する事例的研究
—レジスタンストレーニング系動作の場合—

二神幹¹、岩本紗由美^{1, 2}

¹東洋大学大学院 福祉社会デザイン研究科、²東洋大学 ライフデザイン学部

【目的】スポーツ指導者が選手の動作から問題点を見抜くためには、指導者自身が「運動共感能力」を有することが必要であり、それには「運動経験」が大きく影響すると言われている。そこで、スポーツ外傷・障害につながる問題点の修正を業務としている日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー(JSP0-AT)においても、運動経験の相違が動作観察時の着眼点に影響を与えるのではないかと仮説を立てた。そこで、本研究はJSP0-ATを目指す学生のフィジカルトレーニング(TR)動作観察時における視線計測と印象分析を行うことにより、TR経験の有無で群間差があるかについて検討した。【方法】実験環境：被験者がパソコン画面上での動作観察を行えるように、静寂な会議室などを使用した。実験参加者：JSP0-AT学生のうち、過去にトレーナーからTR指導を受けた経験有りの4名(経験群：EX)と無しの5名(非経験群：NE)を対象とした。実験手順及び分析方法：矢状面および前額面から撮影したスクワット(SQ)、ステップアップ(SU)、フロントランジ(FL)の各5回の映像を観察させた。視線計測：SMI社製アイトラッカーを装着し、視線を計測した。解析ソフトBeGaze(ver. 3.6)を用いて、身体各部位に関心領域(Area of Interest：AOI)を設定し、1回目と5回目を除く3回について解析した。印象分析：各動作から問題点と思われる箇所を口頭で指摘させ、ICレコーダーで録音し、指摘についての件数を分析した。【結果】視線計測：SQの矢状面ではEXが頭頸部10.4%、体幹55.6%、下肢19.0%であり、NEが頭頸部0.4%、体幹35.8%、下肢、47.7%であった。前額面ではEXが頭頸部14.2%、上肢0.9%、体幹35.3%、下肢31.6%であり、NEが頭頸部4.8%、上肢3.9%、体幹34.2%、下肢19.0%であった。両群とも体幹、下肢を中心に分布していたが、頭頸部についてはNEよりもEXの方が高かった。印象分析：各動作のなかでも、SQではEXが外観的表現(外観)2.3件、内観的表現(内観)0.5件であり、NEが外観3.8件、内観1.0件であった。両群とも内観より外観が多かった。なお、SUとFLも同様の傾向であった。【考察】本研究で用いた3動作は、一般的に体幹、下肢のエクササイズに分類されている。そのため、頭頸部についての言及は見受けられないが、頭頸部の位置が姿勢に影響を与えることは既に報告されている。つまり、EXは頭頸部と体幹の位置関係の重要性を経験的に理解していた可能性があるが、NEは一般的な観点からエクササイズを捉え、観察を行っていた可能性が考えられる。【現場への提言】本事例から、JSP0-ATを目指す学生自身のTR指導を受けた経験の有無が、動作観察時の着眼点に影響を与える可能性が示唆された。そのため、TR指導者も学習過程のなかで、TR指導を受けた経験を有することは重要である。